

収蔵館ニュース

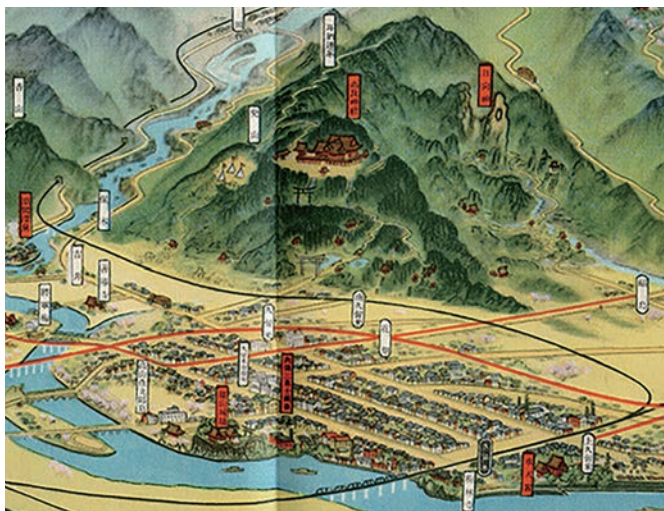
第21号
(改題通算 47号)

K U R U M E C I T Y

2025.3

● CONTENTS

- ・新収蔵資料紹介
- ・六ツ門図書館展示コーナー
- ・特別展「藍より出でて」
- ・守り、伝える
- ・活かし、伝える
- ・トピックス
「150年以上前に描かれた筑後川の治水計画
地元・北野町で初公開」



上段「福岡・久留米・大牟田三都観光図繪」

下段左「福岡・久留米・大牟田三都観光図繪」(部分・久留米市付近) 右「福岡・久留米・大牟田三都観光図繪」(表紙)

新収蔵資料紹介

拡がる鉄道で都市観光に誘う
色鮮やかなパノラマ地図

「河北家資料(第6次)」

中央に筑後一の宮高良神社を配し、その奥から手前に筑後川が弧を描き、画面右の有明海へ注ぎます。画面左には博多湾、その向こうの水平線は唐津と下関の間に引かれています。陸上には鉄道網が朱や黒の線で表され、福岡・久留米・大牟田の3都市を繋いでいます。

昭和14年(1939)7月、福岡・久留米・大牟田3市は「九鉄と緊密に結んで地方発展の一助」とするため、この観光案内リーフレットを発行しました。この月、「九鉄」こと九州鉄道株式会社(現在の西日本鉄道)の急行電車が福岡から大牟田駅まで全通したばかりでした。

鳥瞰図の作者は「大正広重」と呼ばれた吉田初三郎の高弟・前田虹映(1897〜1945)です。色鮮やかに描かれたパノラマ地図は、都市発展の高揚感を映し、人々の旅情を誘っているように感じられます。

新収蔵資料紹介

2024.2
▼
2024.12

水害に苦しむ村々が要望

150年以上前の治水事業計画

「筑後川水吐新川見積絵図」

本資料は、江戸時代に上弓削村（現・北野町上弓削）の庄屋を勤めた緒方家に伝来したもので、筑後川の治水を目的とする新川開削計画をまとめた絵図1舗（縦155・2cm、



筑後川水吐新川見積絵図（西を上にして撮影）。青は河川、黄色は道、緑は堤防の草木などを示す。筑後川は、画面右下の東から西へ流れ、久留米城付近で南に向きを変える

横206・8cm）です。

筑後川中・下流域の安居野村（現・山川安居野）から若津（現・大川市向島）辺りまでの範囲を描き、本流から水を流す新川の計画地を朱線で示しています。最も長い新川は、御井郡和泉本村下（現・東合川町）から三瀬郡草場村（現・三瀬町）まで約6・8kmに及びます。

図の周りには、新川の意義や、工事に必要な人数・賃金・資材等の見積を記し、また新川沿いに櫛木を育て、実の代銀を新川の修繕費に当てるという維持管理策も盛り込んでいます。

内容から作成時期は江戸時代後期とみられ、水害に苦しむ村々が久留米藩に治水事業の実施を要望するため、具体的な計画案として作成したものと考えられます。

（関係記事12ページ）

田主丸町の神職の文書や記録 神社や家族の姿を伝える

「安元家資料」

安元家は、中世以来、若宮八幡神社（現うきは市吉井町）に神職として務めたと伝わります。江戸時代後期に田主丸町へ移り、祇園社（素盞鳴神社）や天満宮に奉仕しました。

令和5年7月、九州北部豪雨による家屋浸水の被害を受け、その復旧に際し本資料群が発見され、田主丸町に關係する内容であることから、本市へ寄贈されました。神社の由緒や祭神などを記した「神社明細帳」や氏子総代会議事録、能の謡本など、総数207点を数えます。

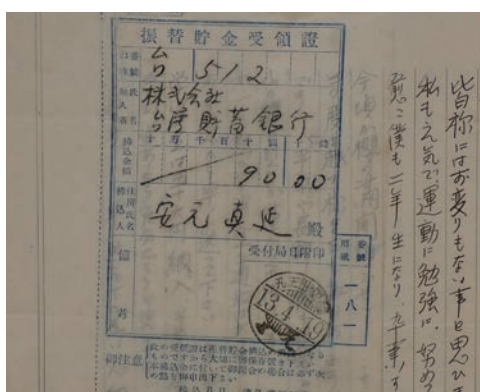


左上から時計回りに会議録、神社明細帳、書簡綴り、御神期大祭記、鞍馬天狗、素盞鳴神社御昇格雑書綴

その一部である「素盞鳴神社御昇格雑書綴」には「素盞鳴神社寶物摸写」が綴られ、同町在住の彫刻師伊東儀左衛門祐良・甚五郎祐勝制作の舞楽面が、鮮明に描かれています。

また寄贈者の父一真氏が、台湾の師範学校時代に父親へ宛てた書簡も含まれており、入学から教員免許の取得、赴任校の決定、兵営地での出来事などを記しています。

左の写真は、師範学校在学中に、授業料と小遣いの送金を父親に依頼する手紙であり、送金後の領収証が貼付されています。一真氏の86円の要望に対して90円が送金されており、今も昔も変わらない親心が伝わります。



昭和13年から2年分の書簡が綴られている

久留米の伝統工芸品と古文書 近現代の暮らしを今に伝える

「西健一郎氏収集資料（第7次）」

本資料群は、西健一郎氏が収集した、藍胎漆器27点と古文書類167点です。

藍胎漆器は、竹で編んだ器などに漆を塗り重ねてつくる、福岡県知事指定特産民芸品です。今回寄贈を受けたものには、近代から現代にかけての茶櫃や煙草盆、火鉢、花器など、さまざまな種類があります。藍胎漆器の生産最盛期を支えた赤松商店・久留米藍胎漆器合資会社（久藍社）の製品が含まれており、



左上から時計回りに茶櫃（赤松商店製）、ふた付湯呑み、煙草盆（共に久藍社製）

藍胎漆器の生産状況の一端を知ることが出来ます。古文書類には、江戸時代から明治時代にかけての、旧久留米藩家老・吉田家に関するもの、

明治時代から昭和戦後期の土地関係証書、新聞・冊子などがあります。

前者には、吉田氏宛の領収書が含まれます。項目は、炭や本のほか、診療料や田租（田にかかる税金）などです。なかでも特に興味深いのは、明治42年（1909）に牛肉問屋が発行したもので、牛ロースが「金五拾銭」で購入されたことが分かります。吉田家は日常的にこの問屋を利用していたようで、紙面に「吉田氏御用」の朱書きがあります。こうした領収書も古文書の一つで、当時の人々の暮らしぶりを今に伝える資料です。



牛肉問屋「近江屋商店」が発行した領収書
店は現在の東京都中央区日本橋にあった

中学新聞は学校生活を映す鏡 「三中新聞ついに誕生」

「三中新聞」

久留米市立第三中学校（現・櫛原中学校）で、昭和25年（1950）6月20日に発刊された学校新聞の創刊号です。

寄贈者の亡き父・近藤重信氏は、文芸部に属し、三中新聞の編集部長を務めました。新聞は学校長の訓辞「生徒としての心構え」、生徒会長の寄稿文「発刊に際して」、「三中七不思議」や、校内での舊棺の発見を伝える「合葬発見さる」、クラブ活動の紹介、修学旅行の思い出など多岐にわたる記事が掲載されています。生徒の手によって作られた新聞からは、自主性を重んじた当時の校風や生徒の気質などがうかがえます。



三中新聞（発行人：小林直三郎）

善導寺町勿体島の市エビス 寄託から寄贈へ

「エビス座像」

総高約30cmの石像で、もとは善導寺町勿体島土井ノ下に安置して祀られ、1月15日、5月20日、10月20日を祭日としました。本像には、昭和16〜44年（1941〜69）の祭日の記録1冊が付属します。

その記録や平成3年度に寄託を受けた際の聞き取りによると、かつて集落の15軒が1年交代で、朝に御酒・御飯を供え、祭日に会食をし、牛馬の売買等の商いも行われていたといえます。勿体島辺りは古来より水害多発地帯で、関係書類の多くも失われてしまったとのことですが、本像には伝承が伴い、集落のエビス信仰を伝えていきます。



エビス座像（正面から）

写真が伝える田主丸の 伝統行事・虫追い祭り

「田主丸・虫追い祭り写真資料」

田主丸町に100年以上続く行徳写真館が、昭和戦後期に田主丸・虫追い祭りを撮影した写真47枚とネガシート5枚（24コマ）です。写真を見比べると、衣装や家並みが異なることから、複数年にわたって撮影されたものであることが分かります。

《虫追い祭りとは》

稲作の収穫前、松明を灯して鐘太鼓を打ち鳴らし、害虫を退治して豊作を祈願する行事です。田主丸地方では江戸時代から行われ、約300年の歴史があります。



昼の部。商店街で、源平合戦を再現した武者2体の合戦が繰り広げられる

《田主丸・虫追い祭り》

武者人形手塚太郎光盛と斎藤別当実盛、竹と藁で作った馬が登場するのが特徴で、昼と夜の部があります。

昼の部（上段写真）では、一行が鉦や太鼓の囃子に合わせて町を練り歩き、武者人形を一体10人ほどで躍らせながら合戦を行います。

夜の部（下段写真）では、舞台を巨瀬川に移し、武者人形を競り合わせる合戦で祭りはクライマックスを迎えます。馬も30数名の若者に担がれて川に入ります。若者たちと、人形に近づこうとする馬が立てる水しぶきが、祭りの臨場感を伝えます。本資料群は行事の一連の流れを収めており、記録写真として貴重です。



夜の部。道路に詰めかけた観客に見守られ、合戦が続けられる武者人形は高さ3m、馬は高さ3m・長さ5mに及ぶ

今も残る河童伝説 川太郎の手

「川太郎の手」

本資料は、草野町に伝来した「川太郎の手」とされる手骨標本です。これは、いわゆる「河童の手」と伝承されているもので、全国に多く残る河童伝説に関わる資料です。縦6.7cm、横4.5cmで、箱の底には、「川太郎之右手 此ヲ処持する人愛敬多 呪力ヲ得る 天保四年二月」と書かれており、河童の手は愛敬と呪力をもたらすとされています。

なお、この「川太郎の手」は鑑定の結果、カワウソの手であることが判明しています。



伝説の河童 川太郎の手

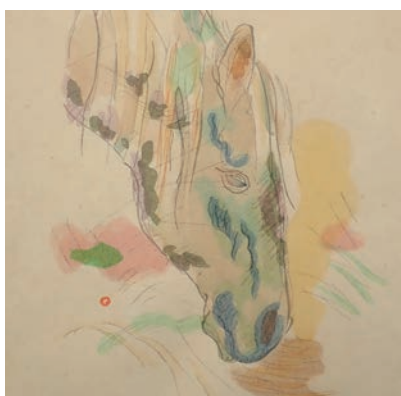
幼少より馬を描いた坂本繁二郎 晩年に制作した版画にも

「坂本繁二郎版画「馬」」

久留米出身の近代洋画家・坂本繁二郎（1882〜1969）は、生涯にわたって、多くの油彩画、水彩画を描くとともに、版画の制作も行いました。本作は繁二郎の晩年、昭和42年（1967）に加藤版画より発行されたものです。

繁二郎は、子供の時から馬が好きで、画箋紙に馬の絵を描いていたと語っています。

昭和6年（1931）に八女に転居する頃から、馬の絵に没頭していき、九州各地の放牧場や馬市へ出かけ、気に入る馬を探してスケッチしました。



坂本繁二郎版画「馬」（部分）

キャッチコピーで 販促効果をたかめる

「ポスター」「本場久留米緋」

昭和戦前期に久留米緋同業組合が発行したポスター2点です。令和5年度の久留米市文化財収蔵資料審議会により本市の収蔵資料にふさわしいとの答申が出され、購入しました。

久留米緋を着用した女性が描かれ、「洗って良くなる」、「衣服の経済、実用第一」など、その実用性を謳う文句が添えられています。緋文様のバリエーションの豊富さに加え、短



くカールさせた洋髪やレースがあしらわれた襦袢などの着こなしの工夫も見どころです。

特に左写真のポスターには「精版印刷株式会社」と印刷会社が明記されています。同社は日本精版印刷合資会社として明治38年（1905）創業、昭和7年（1932）に精版印刷株式会社に改名、同19年まで操業しました。また、久留米緋同業組合は明治22年（1889）に結成され、昭和9年（1934）の組織改編によって解散しました。こうしたことから、昭和7～9年の間に作成されたポスターであると推定できます。

いずれも令和6年度特別展「藍より出でて」（久留米市美術館1階）において初公開しました。
（関連記事9ページ）



上段左「衣服の経済、実用第一」
同右「洗って良くなる」
下段印行名「精版印刷株式会社製版印刷」

新収蔵資料一覧

日付	資料名	点数	氏名	区分
3・26	荒巻家資料	5	荒巻 茂雄	寄贈
3・26	坂本繁二郎版画「馬」	1	匿名	寄贈
3・26	エビス座像	1	匿名	寄贈
3・26	筑後川水吐新川見積絵図	1	緒方 正明	寄贈
3・26	上野健三郎家資料（第10次）	13	上野 健三郎	寄贈
3・29	三中新聞	1	匿名	寄贈
3・29	久留米藩重監千歳丸写真・ポスター「本場久留米緋」	3	今井書店	購入
4・16	薬師如来立像	1	小犬塚南組薬師講中	寄贈
4・16	西健一郎氏収集資料（第7次）	194	西 健一郎	寄贈
5・23	田主丸・虫追い祭り写真資料	71	行徳 肇晃	寄贈
6・13	脇差及び川太郎の手	2	匿名	寄贈
6・24	草野家資料	12	草野 潔	寄贈
8・13	三瀬縣賞状	1	江島 和男	寄贈
8・26	東櫛原町東部自治会関係文書	2	山田 美治	寄贈
9・9	伊福家資料（第3次）	77	伊福 雅	寄贈
10・31	坂田家資料	32	坂田 真知子	寄贈
11・12	河北家資料（第6次）	61	河北 宣正	寄贈
11・12	贈写版及び手廻計算器	2	寺崎 眞	寄贈
11・12	CHIKUGO RIVER RAMPAGE	1	村田 泰英	寄贈
12・9	近現代の市民生活に関する資料	61	匿名	寄贈
12・9	筈及び竹簀	2	永松 敦	寄贈
12・9	藍胎漆器灰皿（引出し付）	1	匿名	寄贈
12・9	重松家資料	222	上野 幸子	寄贈
12・9	安元家資料	207	安元 真洋	寄贈

六ツ門図書館展示コーナー

〒830-0031 久留米市六ツ門町3-11
くるめりあ六ツ門5階
TEL 0942-27-9281
FAX 0942-27-7281

時代も内容もさまざま 新たな資料を毎月初公開

久留米市が新たに収蔵した資料をいち早く公開するため、令和4年度に開始した「新収蔵資料紹介コーナー」。令和6年度も多くの資料をご覧いただけるよう、月ごとにテーマを決めて展示を行いました（左表のとおり）。また、令和4・5年度の新収蔵資料のうち、近世のものは、有馬記念館でも公開しました。



8月展示の様子

月	テーマ
4	郷土歌壇の牽引者・船曳鐵門、 晩春・初夏を詠む
5	米国統治下の沖縄へ ～身分証明書と琉球郵便切手～
6	「三中新聞ついに誕生」 ～創刊号：昭和25年6月20日発行～
7	馬の美しさを写しとる ～坂本繁二郎版画～
8	久留米藩が誇る軍艦の姿を写す ～軍艦千歳丸写真～
9	夜間中学の教師が手元に残した先人の思い出 ～漢詩集～
10	明治時代の旧久留米藩士 ～伊福家資料～
11	明治時代の旧久留米藩士 ～伊福家資料～
12	子孫が書き残した調査記録 ～権藤家資料～
1	善導寺町勿体島の市エビス
2	所持すれば呪力を得る！？ 川太郎（河童）の手
3	歯車を回転させて加減乗除 ～手廻計算器～

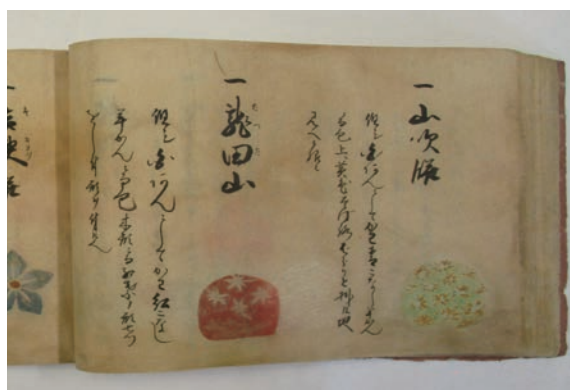
展示替えの予定については、随時、市ホームページでお知らせしています。

令和4・5年度収集資料 有馬記念館でも初公開

令和6年10月19日（土）から令和7年1月13日（月）まで、有馬記念館にて、企画展「江戸時代の人々とくらしー久留米市新収蔵資料公開ー」を開催しました。令和4・5年度に、市が江戸時代の歴史資料を多く受け入れたこともあり、本展での初公開に至りました。

展示では、久留米藩士である伊福家・松崎家、城下町の御用菓子司である松木家、田主丸地方の庄屋である権藤家の資料を通して、江戸時代の久留米藩で、それぞれ異なる立場にあった人々が、各々の環境でどのような役割を担い、暮らしてきたのかを紹介しました。

展示品の中で最も古いものは、約400年前の古文書（伊福家資料）でした。現在でもこうした古い資料が発見されることに驚かされます。時代を超えて人々の事績を辿ること



松木家資料の一つ「御菓子仕立之傳」。和菓子の仕立て方を絵とともに記す



松崎家資料の展示風景

ができるのは、資料が大切に残されてきたからこそです。

100年前の久留米に タイムスリップ

「絵葉書で旅する近代久留米」

会期…令和6年7月13日（土）

～9月8日（日）



高良山の名所を紹介する絵葉書の数々

明治時代後期から盛んにつくられた絵葉書には、記念絵葉書や名所絵葉書など、様々なものがあります。久留米市においても多くの絵葉書が発行されました。

明治22年（1889）に、日本一小さな市として誕生した久留米市は、軍隊の誘致、地場産業の育成などによって経済振興に取り組んでき

ました。その結果、軍関係施設をはじめとした市内の名所・旧跡をめぐる観光客が増え、それらを観光スポットとして紹介した観光地図や絵葉書などがつくられるようになりました。その多くは今でも久留米を代表する観光スポットです。

本展では、久留米市が所蔵する絵葉書の中から、明治・大正・昭和初期に発行された久留米市ゆかりの絵葉書約250点を展示しました。あわせて、絵葉書に採用された19地点の現在の様子を、比較できるような写真パネルで掲示しました。

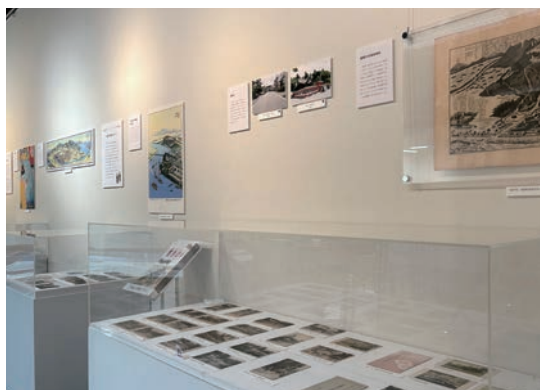
期間中「キーワードクイズ」を実施しました。大人も子どももクイズ



会場正面からの様子

を片手に会場内をあちこちと歩き回って絵葉書を鑑賞していました。

また、来場者からは、「昔の久留米の建築物など見られて興味深かった」、「絵葉書で町の歴史をたどる企画がとても良い」など昔の久留米に思いを馳せる姿や、「昔の久留米と今の久留米の様子を比べられるのもおもしろく感じました。（中略）今回見た絵葉書のことを思い出しつつ行ってみようと思います」、「クイズがあることで、よりじっくり絵葉書を見ることができた」などの感想を聞くことができ、来場者がそれぞれの楽しみ方を発見した展示となりました。



絵葉書の内容と関連する資料や写真をパネルでも紹介した

南北朝・菊池一族 イラストパネル展

会期…令和6年9月13日（金）

～9月29日（日）

久留米市が加盟する南北朝・菊池一族歴史街道推進連絡協議会の啓発活動として開催したものです。主だった武将たちのイラストで人物や事柄を解説、菊池氏3代や本市ゆかりの懐良親王の自立式大型パネルも登場しました。

くるめの考古資料展 「石室を彩る原始絵画」

会期…令和6年10月5日（土）

～11月24日（日）

筑後川流域に分布する装飾古墳について、発掘調査による出土品や写真パネルを通して紹介しました。

久留米市指定文化財「横矧板鋌留短甲」「隈山2号墳出土の山柵玉」などの実物を展示公開するとともに、令和6年10月11日付けで国指定史跡「田主丸古墳群」に追加指定されたばかりの益生田古墳群について発掘調査の最新成果を詳しく解説しました。

むかしのくらし展 学校編

会期…令和6年12月14日(土)

～令和7年3月16日(日)

毎年開催している「むかしのくらし展」。令和6年度は「学校編」とし、学校ならではの行事を紹介する「学校の1年」、思い出深い学校生活を振り返る「学校の1日」の二つの視点で、主に昭和30年代から50年代の資料を展示しました。

「学校の1年」

運動会のプログラム、学芸会で使われた楽器、修学旅行の手引き、卒業証書や卒業文集などのほか、当時の行事の写真をパネルにして紹介しました。



修学旅行の紹介コーナー
画面右の三角形のものは土産品のペナント

「学校の1日」

展示コーナー正面に、教室に温かい音色を響かせていた足踏みオルガンを据え置きました。その周囲には、木製の机・椅子、給食のアルマイト食器、駄菓子屋のおもちゃなどを展示しました。また、関連資料として、職員室で使われていた謄写版(ガリ版)などの道具も展示しました。

来場者は、自らの学校での日々、共に過ごした友人や恩師に思いを巡らせていました。会場では、同級生と一緒に鑑賞し「あの頃の給食にはご飯はなくてコッペパンだった。懐かしい」と思いついた花を咲かせたり、偶然、展示写真に知人を発見した来場者が、職員に思い出を語ったりする姿が見られました。



コーナー正面の足踏みオルガン
手前は児童たちが使った木製の机と椅子

六ッ門だより

六ッ門図書館展示コーナーで、日常的に文化財の資料に触れるようになって5年目の職員です(歴史を学んだのは高校までです)。

古い写真は撮影当時の様子を伝える貴重な資料…とは知っていましたが、こちらに来てようやく、面白さの一端を知った思いでいます。

例えば、右の写真。初めて目にしたときは、看板やのぼり幟が目立つ人の往来が多い通りだなあ(久留米にこんな街並みがあったのか)が感想でした…。

和装にも洋装にもカンカン帽が素敵と思いながら、解説に目を向けると、この写真は「最盛期の三本松通り」で昭和7年(1932)に撮影された写真とのこと。「〇に万」の立て看板は、久留米に初めてできたデパートで、昭和5年(1930)開業の「丸万マーケット」、その奥に並ぶ街灯は『鈴蘭燈』で昭和天皇即位記念に設置された、と知りました。

そういった歴史的な背景を知った途端、写真の上を滑っていた視線のピントが合ったように、当時、久留

米の人々がまだ珍しかった街灯の下、賑やかな通りにできたマーケットに通う情景が、より現実味を帯びて感じられ面白くなりました。今では、他にも古い写真を前にすると、過去を語る詳細はないか?とすみずみまで見るようになりました。

なお、この通りは現在、三本松公園の北側に60m程が残る静かな通りとなっています。



出典『カメラがとらえた久留米の100年 私の街私の時代』
※久留米市内の図書館で貸出しています



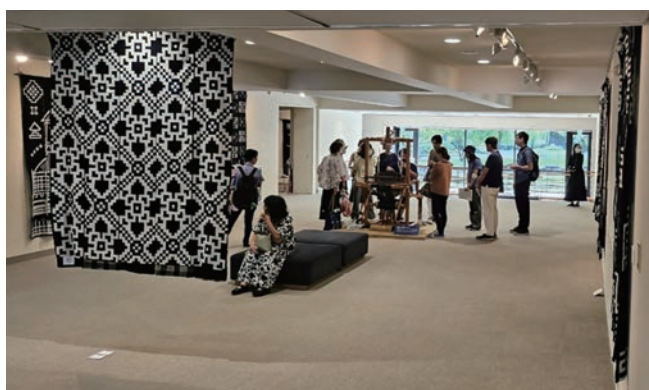
会期：令和6年9月7日（土）～29日（日）
会場：久留米市美術館 1階ギャラリー

筑後川中流域は江戸時代、藍染めに使用する「藍」の栽培が盛んな地域として知られていました。

久留米藩の藍生産や藍染めは、初代藩主有馬豊氏の入国以来、藩領内各地で営まれました。この地に根付いた藍染めの文化は、江戸後期に久留米紺という高品質な染織工芸品が生まれる素地をつくったのです。

久留米紺は、綿糸を素材とし、緻密な計算のもと、柄になる部分を糸の段階で染め分けてから織り上げる「先染めの綿織物」です。数多くの工程を経て高度な技術で制作され、その伝統的な技術は国の重要無形文化財に指定されています。

展示会では、現在は途絶えてしまった筑後の藍に関する資料、井上伝によって創始された久留米紺の歴史、伝統の技を支える道具の展示に加え、同会場で公益財団法人久留米紺技術保存会の重要無形文化財久留米紺作品展「藍と白」も開催され、明治時代から現代にかけての久留米紺作品の展示、卓越した技の記録映像の上映、技術保持者等による機織りの実演が行われました。更に、美術館2階で開催された様々な藍染めをテーマにした展示「藍



機織りの実演に見入る来場者

のものがたり」とあわせて、藍染めの文化についての理解を深めていただき、期間中はまさに「藍色に染まる久留米の秋」となりました。

来場者アンケートでは、回答者の96%の方が「満足」「やや満足」であったと回答があり、改めて久留米紺をはじめとした藍染めの魅力の大きさを感ずる展示となりました。

●来場者の声（アンケートより）

「紺の魅力をよく知れた」

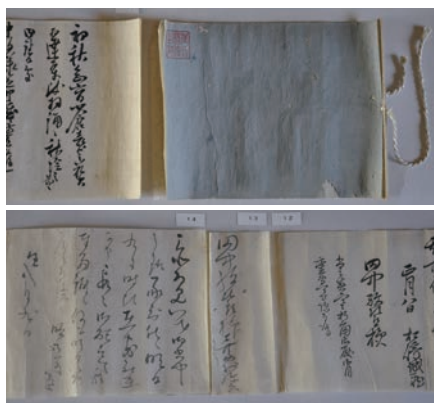
「久留米だからこそその展示。とても美しく丁寧な展示に感動」

守り、伝える

巻子装の書状を修理

紙の折れを防ぐ技術が光る

令和5年度、巻物状に仕立てられた巻子装の書状の修理を行いました。この巻子には、幕末に活躍した久留米藩士・松崎誠蔵や今井栄らによる書状がまとめられています。同様の書状類を収めた巻子は5巻あり、今回はそのうちの一つを修理しました。



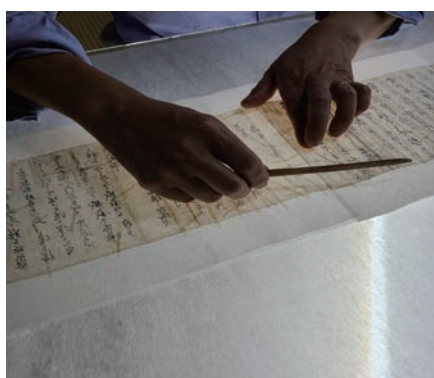
紙の継ぎ目が外れて本紙同士が分離していた

また、本紙を補強する裏打ち紙はほぼ外れており、本紙の折れが多数発生していました。

《修理のここがおもしろい》

本紙の順序が崩れないように並べ、継ぎ直した後に、継いだ本紙全体に裏打ちを行います。裏打ちによって、本紙を補強するだけでなく、折れ皺の大部分を目立ちにくくすることが出来ます。これは、糊の水分で皺が伸ばされるためです。

折れが残っている箇所や、折れが発生しそうな箇所には、折り伏せ（補強紙）を入れます。糊を溶いた水で湿らせた和紙を、3mmほどの細さに裂いて、該当箇所に一本ずつ入れていきます。この細かな作業が、7m分地道に行われます。



一本ずつ折り伏せを入れている様子
紙の裏からライトを当てて補修箇所を確認する

180年前のからくり人形 点検して技術守る

久留米市では、江戸時代の久留米城下町出身の発明家田中久重（1799～1881）が製作したからくり人形2体を所蔵しています。弓曳き童子（市指定文化財）と文字書き人形です。

いずれも製作から約180年が経過し、今後も保存活用していくためには、年に1回、専門の人形師による点検と調整が必要です。人形の緻密な内部構造を取り扱う、繊細な作業の一部を紹介します。

《弓曳き童子》

右手親指、右腕、首の動作や、糸の強度などを確認します。右手親指

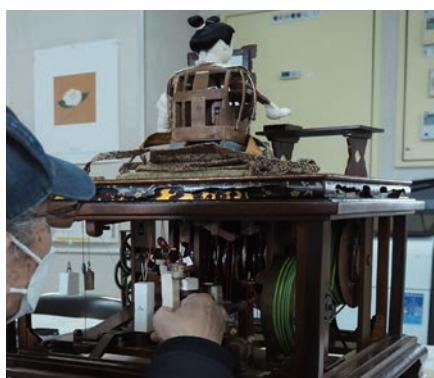


衣服の下に隠れた糸の緩み具合を確認する
木製の部品には「ハ」「ニ」「ホ」と文字が振ってある

は、爪楊枝ほどの細さの矢を確実につかめるよう、動作の調整をします。糸は、人形が座る台下にある歯車と連動することで、滑らかに繊細な動きを生みます。糸の一部が緩んだり張ったりしていると、人形が正常に動かなくなる場合があります。糸の確認は重要な点検項目です。

《文字書き人形》

文字を書く右手の取り付け部分と、人形が書いた書体の確認を行います。書体にずれがある場合は、歯車を作動させるための引き紐や、錘の糸を調整します。このとき、隣り合う糸が絡まないように注意します。この作業により、右手の動きが微調整され、きれいな文字が書けるようになります。



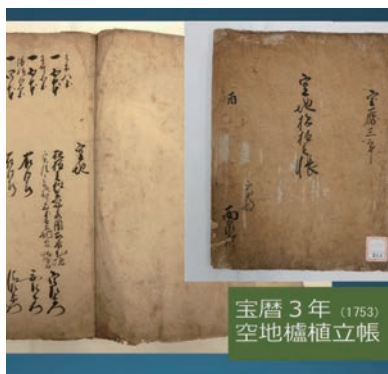
錘を下に引きながら糸を調整していく
錘と連動する歯車がいくつも据えられている

活かし、伝える

江戸時代の久留米知る講座 収蔵資料で説得性増す

文化財保護課では、「私のまちの歴史と文化財」というテーマで出前講座を受け付けています。講座では、市の収蔵資料の実物を見てもらったり、説明の根拠として資料画像を使ったりします。

令和6年10月31日、「久留米藩と^{はせ}櫓」と題して、江戸時代の久留米藩の経済事情を、藩の商品作物であった櫓を中心に紹介する出前講座を行いました。江戸時代中期、久留米藩は、米以外の収入源を確保するために、櫓や藍といった商品作物の栽培



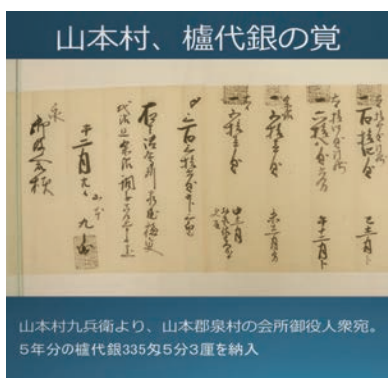
出前講座の資料の一部
「空地櫓植立帳」の表紙と見開き部分

を奨励しました。櫓の植え立てや、櫓の実の流通による収益を説明する際、キーポイントとなったのが、^{なが}弥永家資料です。

弥永家資料は、江戸時代に山本郡^{にしきみ}西泉村(現・山本町^{みのう}耳納)の庄屋職を勤めた弥永家に伝来した古文書群で、藩の農政に関する記述が多くあります。宝暦3年(1753)の「空地櫓植立帳」には、誰が何本櫓を植えたのかが書かれています。

また、ある覚書では、山本久兵衛^{おほえがき}という人物が、山本郡泉村の役人に宛てて、櫓の実の売却で得た5年分の代金を納入したことを報告しています。

受講者は、資料から分かる、当時の村人が櫓で生計を立てていた様子を、興味深く聞いていました。



櫓代銀の覚書

久留米藩参勤交代の記録 秋月博物館で街道の実態示す

久留米市の収蔵資料「北筑雑藁」^{きたちくざつこう}が、朝倉市秋月博物館特別展「受け継がれし秋月藩～藩主の心得～」(会期：令和6年10月19日～12月15日)で展示されました。秋月藩は、黒田長政の三男長興^{くろだながまさ}が福岡藩から所領を分与されて成立しました。展示では、秋月黒田家の足跡を辿るとともに、特集として、参勤交代で使われた秋月街道や、秋月藩の治水遺構が紹介されました。

北筑雑藁(真名部^{まなべ}仲庵^{ちゅうあん}著、延宝3年(1675))は、秋月街道の特集部分で展示されました。本資料は、漢文体で書かれた久留米藩の地誌で、後半には、秋月街道の宿場町に関する記述があります。展示箇所からは、久留米藩が参勤交代の際に「筑前國秋月」を含む8つの宿場町(八町)を経て大里(現・北九州市門司区)へ向かう道を使用していたことが分かります。

秋月博物館学芸員の平田詩織さんは、その記述に関

して、「久留米から大里に向かう道^{はつちようこえ}「八丁越(＝秋月街道)」について、各宿場までの距離や、八丁越と呼ばれた由来が記されており、秋月街道がどのような道だったかを観覧者にイメージしてもらいやすい。」と話しました。

秋月街道は、江戸時代前期に長崎街道(資料中では「冷水越」^{ひやみずこえ})が整備された後は、参勤交代では利用されなくなります。北筑雑藁は、諸藩が利用した秋月街道の実態を今に伝える重要な資料です。



「久留米」「秋月」などの宿場町の地名には朱線が引かれている

150年以上前に描かれた 筑後川の治水計画 地元・北野町で初公開

筑後川は、長さが約143キロメートルで、九州で一番長い川です。流域面積も九州で一番大きく、多くの人々が筑後川の水を使って暮らしています。昔から洪水や水害が多く、2年に1度は堤防が決壊すると言われました。1573～1876年の294年間には、166回の水害が発生しました。こうしたことから、筑後川は関東の利根川、四国の吉野川とともに、日本三大暴れ川に数えられています。

筑後川の治水は、江戸時代初め頃から、領主の主導で大規模事業が行われるようになりまし。江戸時代後期になると、水害に悩まされてきた地域から、増水した筑後川の水を流すための新川（新しい水路）をつくる構想が持ち上がります。明治時代にかけて、複数の新川計画が作られたことは知られていましたが、計画書そのものはこれまでほとんど確認されていませんでした。令和6年3月、その計画書の一つである絵図が本市に寄贈されました。今から150年以上前に作成され、北野町の旧家に伝わってきたものです（2ページ参照）。これを受けて、5月19日（日）、コスモすまいる北野を会場に「新収蔵資料〈筑後川水吐新川見積絵図初公開〉を開催しました。

この初公開展示は、貴重な絵図が残されてきたことをいち早く地元の方々を知ってもらいたい、そして洪水の多い梅雨時期を前に筑後川の水害と治水の歴史を振り返ってもらえれば、との思いから企画したものです。また、久留米市流域治水推進プロジェクトとも連携して、田んぼダムや雨水貯留施設の周知も図りました。

開催の前には、西日本新聞（5月11日）や読売新聞（5月18日）に紹介され、当日には、朝からKBC九州朝日放送の取材カメラが入り、夕方のニュース番組で放送されました。来場者の総数は215名でした。



計画のままに終わった「筑後川水吐新川見積絵図」ですが、新川開削計画地と工事にかかる人員や金額が具体的に記されています。

「新川の幅や深さは？」

「工事費をいまのお金に換算すると？」

「いま同規模の工事をするとしたら？」

「完成していたら、自宅のすぐ近くに新川が流れていたかも…」

「どのくらいの治水効果だろうか」

それぞれに絵図を読み解いていく来場者から、さまざまな意見や質問が寄せられました。なかでも「もし計画が実行されていたら」という点に、多くの関心が集まっていたように思います。

終盤には、おそらくこの時たまたま居合わせた来場者同士が、絵図を囲んで互いの記憶や知識、経験を語り、意見を交換する、座談会のような時間が訪れました。

流域に暮らしてきた方は、先祖代々語り継がれてきた筑後川の歴史を。また、上流・下流それぞれの地点から見てきた筑後川の景観とその移り変わりを。今まさに治水事業に携わっている方は、治水の考え方にについて現在との比較を。公開時間の終了を迎えるまで、話は尽きませんでした。

来場の皆様には、絵図を捉える多様な視点、歴史資料だけでは知り得ない筑後川の歴史など多くの示唆を受け、企画者として望外の喜びです。

【編集後記】

令和6年度も、市民の皆様より、多くの資料が寄贈されました。資料を整理していると、100～200年前のものが残っていることに感慨深くなります。久留米市内には、まだ古いものが多いという眠っているのではないだろうかと考えます。

ご自宅などの整理で出てきたもので、今後の保管について迷った際は、一度、文化財保護課までご相談ください。相談の流れは、左記QRコードからご確認くださいませ。



『収蔵館ニュース』第21号

発行年月日 令和7年3月31日

編集・発行 久留米市 市民文化部 文化財保護課
久留米文化財収蔵館
〒830-0037
福岡県久留米市諏訪野町 1830-6
電話・FAX 0942-38-6194
E-mail bunkazai@city.kurume.lg.jp

「収蔵館ニュース」前号（第20号）はこちらからご覧いただけます。

久留米市ホームページ ➡ <https://www.city.kurume.fukuoka.jp> > 観光魅力・イベント > 文化財・歴史 > 刊行物の案内 > 【配布物】収蔵館ニュース